

「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第9回フォーラム研究会
逐語録

(木村) それでは、第9回のフォーラム研究会を始めたいと思います。

まず、資料に番号を振っていききたいと思います。議事次第がF9-0です。前回の議事録案がF9-1です。次に、フォーラム参加申込書が2枚ありますけれども、Q3が「職業」になっているものが首都圏住民向けのものです。F9-2でお願いします。Q3が2つに分かれているものが原子力学会員向けのものです。F9-3でお願いします。次に、両面に表が書かれている資料がF9-4になります。今年度の調査の結果の抜粋がF9-5です。最後に、竹中君が配布したパワーポイント資料がF9-6になります。よろしいでしょうか。

それでは、早速始めていききたいと思います。議題1は、フォーラム参加者選定に関する議論ですが、社会調査との関係もあるので、土田先生が来てからにしようと思います。ですから、議事録確認が終わった後、まず議題2から進めたいと思います。

0. 議事録確認

(木村) まずは議事録確認です。前回の議事録案をメールで共有するのを忘れていたので、今日はじっくり見ていききたいと思います。

第8回は1月21日に実施しました。フォーラムのシステム化について議論をしたということです。

まず、「フォーラムがビジネス要件を達成するために満たすべき要件」。「参加者と目的を共有する」ことも柱として据えるべきではないか、という意見をいただいています。

参加者と目的を共有するという意味で、「オリエンテーションで目的を話す」「誘導ととられないように、話す内容、時期の考慮が必要だ」「目的を短い文章にまとめ、毎回提示するといいいのではないか」「目的(Objection)とゴール(Goal)を使い分けてはどうか」という案が出ています。フォーラムの目的は、立場を越えてお互いを理解し、尊重できるための新しい関係性を生み出すこと。参加者のゴールは、個人によって異なる可能性があるということ。フォーラムの目的を共有してもらいながら、ゴールは参加者の中で設定してもらっても構わないということです。

次に、「参加者がお互いに尊重できる」ということについて、「1. 参加者間の社会的リアリティの違いに気づく、いろんな考え方があると気づく」という点に関しての話ですけれども、様々な具体的な意見が改めて確認されたということになります。

「2. お互いが違っていてもいいんだと思える」「3. 参加者同士が対等である（主に市民と専門家）」についても、話し合われました。

「フォーラムを実施するために満たすべき要件」も別途ありまして、その中には、「4. 参加者同士が公平である」「5. 運営側への信頼の獲得」という項目があります。「6. 参加者のやる気」が、新しく必要だということが出てきたと思います。「7. 運営側のノウハウ」に関しては、今後も十分な検討が必要だということ話し合ったということになります。

フォーラムのシステム化については、次年度、フォーラムの前に何回かミーティングをして、さらに検討したいと思います。また、今回も予備フォーラムをやってみたいと思います。

少し話が逸れますが、NHKの人からインタビューを受けていまして、その中で、取材をさせてほしいというお話がありました。我々に対してだけでなく、前回のフォーラム参加者に直接話を聞かせてもらえるような人はいないか、という打診も受けています。シンポジウムで登壇していただいた方をお願いすることになると思いますが、こちらのほうから、こういう要望が来ていますいかがでしょうか、という打診をして、向こうがOKであれば紹介する、というプロセスを取ろうと思っています。こちらに関しても、後ほどご意見を伺いたいと思います。

それから、実際のフォーラムの様子も取材したいと言われたのですが、それはできないということでお断りしました。そうしたら、「フォーラムとは（模擬フォーラムの写真）」を指して、これでもいいからぜひ見せてほしいということだったので、模擬フォーラムをするときに取材が来るかもしれません。現在調整中です。

以上が、前回から今回までの間の進捗の話です。

—— ステータスを得るためには、取材を受けるのはいいと思います。ただ、いいように使われるかどうかは別ですけど。

（木村） はい。ただ、この前1時間半くらいいろいろお話をして、問題意識はかなり共有できたと思っていますので。

取材に関しては今言った方針で大丈夫ですか？ では、私のほうからシンポジウム登壇者に連絡をして、NHKとの調整も間に立ってみようと思います。

ちなみに、2月27日にJSTの成果報告会があって、そこでポスター発表をしてきたということは報告しておきたいと思います。そのときにもNHKの方に来ていただいて、いろいろとお話をしたということです。

ということで、いろいろ話は逸れましたが、議事録案に関して何かあればまたご連絡い

ただければと思います。

2. フォーラムインタビューの分析

(木村) 続いて、議題 2 を先にやっけてしまおうと思います。フォーラムインタビューの分析ということで、竹中君からお話をさせていただきたいと思います。

(竹中) インタビューそのものを分析するというよりも、システム要件と照らし合わせることに重点を置いています。

(スライド 2) まず、そもそもインタビューでどういうことを聞いたのかを確認したいと思います。

テーマは、

1. 原子力やエネルギー全般
2. 原子カムラ
3. 原子力の専門家
4. 一般市民と原子力の関係
5. フォーラムについて

になります。それぞれに対して、フォーラムに参加する前後の考え方や、考えがどうして変わったのか、どういう気づきがあったのかを聞いています。

5 については、フォーラムについてまだ話し足りないことはありますかという形でお聞きしました。変化について語られていることもあるということで、こちらを分析対象にしています。

(スライド 3) スライド 3 に、インタビューの結果のまとめ方の例を示しています。これはある方のインタビュー結果なのですが、縦軸は先ほど挙げたインタビューの各テーマで、それぞれに対して、前後で考えが変わったこと、変わったきっかけ、いつ変わったのかをまとめています。

(スライド 4) こういう形で全員のインタビューを整理したわけですが、それらに対して、システム要件との比較を行なっています。

「1. 参加者間の社会的リアリティの違いに気づく、いろいろな考え方があると気づく」ために、①から⑤の要件があると。スライド 3 で整理した変化したきっかけが、このシステム要件の中のどれに当てはまるのか。あるいは、当てはまらないものがあるのか。このシステム要件を満たすことが、どのような変化を促すのかを見えています。

①から⑤の要件についてですが、「①客観視をする」と「③冷静なコミュニケーション」の区別が難しいということで、ひとつにまとめています。加えて、「知らなかった事実を知る」という要素もここにまとめています。

(スライド5) ここからは、インタビューの各テーマについて、どのシステム要件がきっかけになって、どのような変化が起こったかということをもとめています。

まず、「1. 原子力とエネルギー全般」について、市民参加者にどのような変化が起こったのかということをもとめています。基本的に、「①客観心をする」「③冷静なコミュニケーション」「知らなかった事実を知る」というような、事実ベースの変化がほとんどであると言えます。

細かい変化については後ほどご覧ください。

(スライド6) 一方で、専門家参加者についてですが、専門家なので、エネルギー全般に関して意見が変わるということはほとんど見られなかった、という結果になります。

(スライド8) すみません、スライド7とスライド8は逆になっています。スライド7が専門家のまとめ、スライド8が市民のまとめです。

「2. 原子カムラ」に対して、市民にどのような変化があったのかというと、基本的には事実ベースの変化が多いということです。

市民は、元々「原子カムラ」のイメージを持っていなかったけれども、そういうものがあるということを知った、という変化がメインでした。

(スライド7) 一方で、専門家は、元々イメージを持っているということで、「市民の方はそういうふうにするのか」という変化はあったけれども、自分のイメージが変わったということはほとんどない、という形になっています。

ということで、ここまでは基本的に事実ベースで、そういう考え方もあるのだなということに気づいた、くらいの変化になります。

(スライド9) ここから先が、「お互いに尊重する」ということを考える上で重要なところだと思います。

「3. 原子力の専門家」について、市民参加者にどのような考えの変化があったのか、それがどういうことによって引き起こされたのかをこちらにまとめています。

「④本音を話し合う」が効いて変化しているというケースが多いので、次のスライドに参考として羅列しています。基本的に、②、④、⑤がメインで効いてきているのかなという感じです。

ええと、この辺で一旦切ったほうがいいですか？

(木村) 「知らなかった事実を知る」をプラスにしているのはなぜですか？

(竹中) そういう項目が要件になかったからです。

(木村) だとしたら、①③と一緒にするのではなく、新たに独立した項目として作ったほうがいいのではないのでしょうか。

例えば、今まで見てきたものは、「①客観視をする」「③冷静なコミュニケーション」＋「知らなかった事実を知る」とあるけれども、①や③に含まれるものはなくて、「知らなかった事実を知る」だけだと思います。

(竹中) そうですね。

そうすると、でも、①、③はないのかなという感じもするのですが。

(木村) スライド9の「専門家がきちんと専門的な話ができる」は、「知らなかった事実を知る」ではないので、①、③に該当すると思います。

だから、①、③に含まれるものと「知らなかった事実を知る」に含まれるものを分けたほうが良いと思います。

「②人となりを知る」というのは、いわゆる「知る」ことだし、「知らなかった事実を知る」も「知る」ことだけど、「①客観視」や「③冷静なコミュニケーション」、あるいは「④本音を話し合う」は「雰囲気」の議論でしょう。そういう分け方のほうが良いと思います。

(竹中) それを全部まとめて議論してしまってもいいということですか？

(木村) いや、分けておく必要はあると思うけれども、その上で大きな分類で分けることはできるでしょう。

(竹中) 分かりました。では、そういうふうに整理し直してきます。

では、続けてよろしいでしょうか？

(スライド12) スライド12には、専門家が同じ「3. 原子力の専門家」に対してどういう思いを持っているのか、どういう変化が生じたのかをまとめました。

「④本音を話し合う」を基に変化が生じていることが多いようです。

中には、同じ専門家としての立ち振る舞いを見て、「こういう専門家もいるのか」と驚いて、さらに、「これはないだろう、自分はこうしなくては」というような意見も聞かれました。「驚いた」というところまでは④に当てはまると思うのですが、これはないだ

ろう、自分はこうしなくては」というフィードバックまで④に含めていいのかどうか、悩んでいるところです。

—— 「こういう専門家もいるのか」というのは、具体的にはどんな話をされていたのですか？

(竹中) スライド 12 にも挙げられていますが、他の専門家を見て、「原子力に悲観的な人がある」「こんなに自信がない弱気な人があるのか」「冷めてものを見ている」と思った、というコメントが出ています。

(木村) ここは、誰がどういう意見を言っているのか、興味深いですね。

—— こうやってまとめて書いてあると、多数意見のように見えるのですが…。

(竹中) いや、多数意見ではないです。

(木村) これは並列して書くべきではないですね。誤解されるおそれがあると思います。

—— 2~6 つ目のポツは、同じの人の意見のような気がするのですが。

(竹中) 確かに、2、3、4、5 は同じ人の意見ですけれども、2、3 は他にもそういう意見を言っている人がいます。6 番目は、別の人の意見です。6 番目のポツについても、そういうことを言っている人が 2 人いるという形です。

—— 専門家 10 人のうちの 2 人ということですか？

(竹中) 正確には 1 人中途リタイアされているので、トータルは 9 人ですが、そのうちの 2 人が 6 番目の意見を言っています。2、3 に関しては、2~3 人からそういう意見が聞かれます。

—— 解釈としては、例えば 2 番目のポツは、「自己否定を発している人がいた。これはないだろう。自分はこうしなくては」とつながっていくということですか？

(竹中) そうです。

—— 私には、2 番目、3 番目のポツが 4 番目のポツにつながっているように読めました。

2つ目のポツが「自虐的なのはおかしい」、3つ目は「卑下するな」。そして、4つ目のポツの後段で、「専門家として誇りをもって専門的な知見を話すべき」と。だから、2つ目、3つ目のポツは、4つ目のポツの前段として位置づけたほうがいいのではないのでしょうか。

(竹中) 前段として位置づけている人は1人で、例えば3ポツだと、「必要以上に自分たちを卑下することはないのかな」と思ったのはまったく別の人で、その人はこれを単独で言っています。

2つ目のポツに関しても、「専門家として自分は真摯にちゃんと対応しなければならないと思った」と「専門家で自虐的に自己否定を発している人がいた」は違う人です。

—— だけど、「必要以上に自分たちを卑下することはないのかな」という発言の裏には、やはり4つ目のポツの、「誇りを持って話すべき」が隠れているような気がしますけれども。

(竹中) そこまでは言い切れるかどうかは微妙です。

—— なるほど。そこまではご本人は言わなかった？

(竹中) そうです。

(木村) 具体的な意見を挙げるのはいいけれども、グルーピングをして整理をすべきだと思います。

大きくは、「専門家は専門家然としていくべきだ」という話と、「非専門家の人たちと交わって頑張ろう」という話に分けられるような気がします。

—— ポツの並び順に意味はあるのですか？

(竹中) 特に意味はないです。

(木村) 整理をして、そのままではない形まで昇華したほうがいいのかもかもしれません。

(竹中) その昇華をするときに、並列にするとそれが全体の意見のように見えるというのは、どうすればそう見えなくなるのでしょうか？

(木村) まあ、それは解説するしかない。こういう基礎情報だったら、人数を入れるのはひとつですね。

—— 読む側から見ると、何人いたかというのは重要だと思います。

(竹中) そうすると、結構同等になるのですけれども、大丈夫ですか？

(木村) でも、それが同じ人でなければいいのでしょうか。何人中何人がそういうことを言っていたと。でも、その何人が全員同じです、ではないわけだから。全員が同じだったら1つの意見にまとめればいい話で。

まあ、インタビューなので、多い、少ないの議論をしても仕方がないのですよ。全体としてこういう意見の分布がありますと。その分布の全体像を眺めるものがインタビューだ、と思ったほうがいい。対等ではないけれども、これくらいの広がりがあります、という言い方。そういうことをしないと駄目だと思います。

—— 「自虐的」と言われた人にもインタビューをしているわけですよね？

(竹中) はい。相手が誰かを言わない人もいますが、名指しで言っている人もいます。専門家同士の対立構造みたいなものは少し見えています。

(木村) そういうものを示すことが重要です。市民のほうもそれを見ておいたほうがいいでしょう。

あとは、どういう属性の人たちなのか、ということとある程度対応付けをしたほうがいいのかもしれませんが。

(竹中) そうですね。そういう意味では、システム要件との照らし合わせはしましたけれども、インタビュー内容の分析自体はおろそかになっている感じがあるので、どういう意見があったのかという分布、まとまりをしっかりと見せるようにしたいと思います。

(木村) かといって、システム要件に反映できないような分析をしても意味がないので。そうでないと、どういうファンクションが必要かという議論になりません。今考えている要件に合致しない意見はどのようなものがあり、それはどうフォローしていけばいいのか、という議論もしなければなりません。

(竹中) 先に言ってしまうと、この要件に当てはまらないものはありませんでした。

(木村) だとすると、それなりにいいシステム要件を構成できたということでしょうか。

—— 専門家を分けるというのは分かるのですけれども、市民はどのように分けるのです

か？

(木村) 逆に、市民を分けるいい方法がないか、お聞きしたいところです。

必ずしも、原子力に賛成／反対ではない気がするのです。例えば、自分でどんどん行動したいか、教えてほしいか、という差かもしれない。それに応じて、専門家の態度も、どんどん教えてくれる人をよしとするのか、それとも、自分の話を聞いてくれる人をよしとするのかが、変わってくるかもしれません。

(竹中) それを言う人は、どちらも言うのですよ。「聞いてくれたし、話してくれた」と。

—— 市民の最後のポツは非常に重要だと思います。専門家はやはり理屈を言いがちだし、市民は理屈よりも感性を重視する人が多いと思います。このギャップは非常に重要で、これもひとつのくくり方だと思います。

最初のポツも重要で、非常によく分かる。安全と安心の差の問題で、これは当然専門家と一般の方で大きなギャップがあるはずですよ。

—— 社会調査で、福島県の野菜や魚は安全だと思いますかという質問をしていますよね。首都圏住民は、真ん中の「どちらともいえない」という方が多いのですよ。それに対して、原子力学会員は、安全だと答える方が多い。スライド 10 に書いてある、「一般の人が感じる不安は、専門家にとっては普通に安全だと思っていること」というのは、そのことを言っているような気がします。

—— 「一般の人が感じる不安は、専門家にとっては普通に安全だと思っていること」というのは、市民の方が言っているのだから、「専門家が市民のことを理解していない」と言っているということですか？

一般の人側もある程度原子力について理解するべきだ、という考え方と、専門家が一般の人が感じている不安について理解するべきだ、という考え方と、両方あると思うのですが。

(竹中) この意見を言っている方は 2 人いて、1 人は、「専門家も歩み寄らないといけなけれど、市民も歩み寄らないと」とおっしゃっていました。もう 1 人は、「専門家が歩み寄ってください」という感じだったと思います。

—— 「一般の人が感じる不安は、専門家にとっては普通に安全だと思っていることで、ギャップは埋まらない」となっているけれども、このあいだに何かワンフレーズありそうな気がします。専門家の努力が足りないという意味を込めているのか。知識が不足してい

るといふことを言っているのか。なぜ「ギャップは埋まらない」のか。

—— 逆に、専門家側から、これをひっくり返したような意見はなかったのですか？ フォーラムのときにそういう発言をしている方もいたと思うのですけれども。

(竹中) あると思います。

(木村) 今は「3. 原子力の専門家」がどのように見えるのかの話で、その後「4. 市民と原子力の関係」はどう見えるかという話があるので、そこで出てくるはずですよ。なので、先に進めてください。

(竹中) (スライド 13) はい。ではスライド 13 です。市民がお互いにどう思っているのかというところは、あまり意見が出てきているわけではありませんが、先ほど言ったような、「受け身過ぎる。情報は降ってくる、ぐらいなものだと思っている」という意見もあります。

(スライド 14) 専門家が市民をどう思っているのかというと、一番多いのは④の部分で、スライド 15 に参考としてまとめています。

(スライド 15) 下から 2 つ目のボツ、「漠然とした恐怖がある。専門家にはそれがない。それが壁になっている」「漠然とした不安というのは新鮮。これはロジックでは解決できない」というような意見があります。

—— 一番下に、「話せば分かってくれる人もおり」という意見がありますが、市民のグルーピングをするヒントがここにありませんか？ 自分の意見に凝り固まっている人と、ある程度理解しようと努めるタイプの人。「分かってくれる」まではいかなくても、相手とコミュニケーションをする気がある人と、初めから「どうせ専門家はこういう人だ」と決めつけてかかっている人、とか。

(竹中) スライド 15 は、「相手のことをどう思っていますか」という意見をまとめたものではなくて、「相手に対して思っていたことがどう変化しましたか」という変化後の意見をまとめているので、今おっしゃったような、「端から聞く気がない人」は、「私は何も変化しませんでした」と答えているので、その方の意見はここには入ってきません。

まあ、そういう方が何人くらいいるのかというのは、項目ごとに取ってはいるのですけれども。

—— 考えが変化したものだけを載せている？

(竹中) はい。

—— そうすると、例えば、「話せば分かってくれる人もおり」と答えた方は、フォーラムの前は「一般の人は話しても分かってくれない人しかいない」と思っていたけれども、フォーラムを通じて、いろいろな人がいるということに気づいたということですか？

(竹中) そういうことです。もっと反対されると思った、議論にならないのではないと思って来たら、意外と話せたということですか。

—— この人は、一般の人は皆分かってくれないと思っていたけれども、よくよく話をしてみると、中には分かってくれる人もいるし、全然変わらない人もいるし、努力をしようとしている人もいます。3種類くらいに分類できますね、と言っているわけですね。

—— このまとめ方だと、変化後しか書かれていないので、何から何に変化したのかが見えませんね。そういうことをもう少し明記したほうが良いと思います。

(竹中) データとしては、フォーラム前の考え方、フォーラム後の考え方、変わったきっかけという形でまとめてあります(スライド 3)。フォーラム前の考えが書いていないものは、知らなかったことを新しく知ったということですか。

そういう形で一応データとしてはまとめてあるのですが、膨大な量なので、どうまとめていいかが難しくなっています。

(木村) でも、そのベースデータの時点で整理していかないと。スライド 15 のようにポイントだけをピックアップしても、何を言いたいかがよく分かりません。

—— うまく絵で示すことができないのでしょうか。いくつか類型がありましたよね。それをくくるとスライド 3 みたいになります。そうすると、ひとつにくくるところだけで、内訳を見てみると、いろいろな変わり方をしている人がいるのだなということが分かる。

(竹中) そういう意味では、意見が変わっていない人も図示すべきですね？

—— そうです。それで、パーセンテージが書いてあると、ビジュアル的に分かる。

—— 変わっていない人がいるということも、分析上は大切ですね。

—— 変わっている人と、変わっていない人は、どういう傾向にあるのですか？

(竹中) 変わっていない人は、ほぼ全ての項目が変わっていないと答えています。

(木村) とりあえず最後まで行って、その後フリーディスカッションをしましょう。

(竹中) (スライド 16) はい。あとは、先ほどのテーマの 1 から 4 に入らないものをその他項目として整理しています。

市民のその他項目は、経験が自分の考え方にフィードバックされた、というようなことがいくつか挙がっています。

(スライド 17) 専門家については、専門家同士の立ち振る舞いを見て、自分がどうすべきかを考えた、という先ほどの話はここに持ってきてもいいのかなと思っています。

(スライド 18) 最後に、考察を述べています。

市民と専門家が、お互いに対する認識の変容を起こすためには、システム要件が全体的に整っている必要がある、ということはあると思っています。ただし、認識の変容は必ずしもポジティブなものだけではないと。

システム要件「②人となりを知る」「④本音を話し合う」に関しては、第 4 回フォーラムがきっかけになった場合が多いということ。あとは、フォーラムの最後の一言感想や歓談・懇親会です。こういったところが、意見を率直に聞けるということで挙げられることが多いと。実は、それ以外の具体的な場面が挙がってくるケースはあまりなくて、全体の雰囲気を通して、というコメントが多かったです。

システム要件の「2. お互いが違っていてもいいのだと思える」に対して、①～⑤の何が効いているのかを考えなければいけない。ただ、変わっていない人もいるから、これがあれば十分である、と言うことはできないと思います。必要条件であるということは言うことができるのかな、どうやったら言えるのかなというのは、コメントがほしいところです。

全体として、当たり前かもしれませんが、漠然と持っていた考えは変化していることが非常に多いのですが、強い考えはあまり変化していません。強い考えについては、むしろ、それをフォローするような証拠を持って、確信に変わりました、という意見が多く聞かれました。

(スライド 19) 以上になります。ご意見をお願いいたします。

(木村) はい。では、まず私から。フォーラム記録との突き合せはまだやっていないということですね？

(竹中) いや、突き合せができるところはやっています。でも、「全体を通して」という場合が7割くらいあるので、突き合せられない場合が多いのです。

(木村) 確かに全体を通してという意見は多かったと思いますが、それ以外の場面もあったと思うのですが。「あの人がああ言ったときです」とか。

(竹中) そのほとんどは第4回フォーラムになります。

(木村) 「漠然とした不安」は第4回でしたか？

(竹中) 第4回だと思います。

(木村) それを単純に第4回とくくってはまずいと思うのですが。「こういう会話でピンとききました」と言っているのだから、「こういう会話」がどこでどういう文脈で話されているのかをチェックする必要があると思うのです。最後の一言感想は確かに端的だけれども、その一言感想が果たしてどこから出てきたのか、という議論でしょう。

(竹中) 該当部分はしっかり出すようにしたいと思いますが、それほど多くないというのは確かです。

(木村) なるほど。そうすると、何が原因で変わっているのでしょうか？ 漠然とした雰囲気？

—— 毎回多くの人の意見を聞く機会があつて、しかも5回繰り返していながら、まったく意見が変わりませんというのは不思議ですね。どのようにシステムを改善すれば、変わるようになるのか。どうして変わらないのかを考えないといけない。

(土田) ただ、変わっていても、本人が変わっていることに気づいていない場合もあります。

(木村) そうです。なぜフォーラム記録を見なければいけないかというと、記憶の改ざんをしている場合があるからです。

(竹中) 記憶の改ざんがなされていると私が判断できる場合は、その旨を明記すべきですか？

(木村) はい。そのための記録なので。それをしないと、その人が勝手に思い込んで言っている場合もあるので。

あと、変容は必ずしもポジティブではないという話に関しては、どう思いますか？ 私は、そこまでコントロールするのは逆におかしいと思うのですけれども。

(竹中) まず、コントロールしなければいけないとは思っていません。

(木村) だったら、別にポジティブもネガティブもないのでは？

(竹中) ただ、システム要件にそぐわない変化であるときに、

(木村) 具体的には、どういう変化ですか？

(竹中) 例えば、スライド 10 の上から 2 つ目の「サラリーマン的な発言をされ、信頼が落ちた」は、目的にそぐわないと思うのですけれども。

(木村) 別に信頼を上げるためにやっているわけではないから、構わないと思います。尊重するためにやっているのであって。信頼できない人は信頼が落ちなきゃ駄目なのですよ。

—— 全員が信頼できる人とは限らないですよ。

(木村) 限らない。それが判断できるようになるということが大切だから。

(土田) むしろ、データとしてはありがたいのでは？ そこを改善すればいいと教えてくれるわけですから。

すみません、遅れてきて、もう議論が終わっているかもしれませんが、2 つコメントがあります。

1 つは、スライド 3 のようなデータを作っているわけでしょう？ だとしたら、ひとつのセルごとに附箋にして、フォーラムでやってみたいに、グルーピングをしてみたらどうでしょうか。縦でまとめてみたり、横でまとめてみたりしたら、描ける絵があると思います。1 人に任せるのではなくて、皆でやりましょうという話でもあるのですが。

—— それは面白い作業かもしれません。

(土田) もう 1 つは、市民のほうのメカニズムは、専門家から何かを言われたというよりも、周りの人たちがこうだから、というほうが大きいような気がします。なぜこう思ったかという、昨日 NHK で震災の特集をやっていて、福島の市民がこんなことを言っていたのですね。不安だと言えないと。もし私が危険だと言ったら、子どもが学校でいじめられるのではないかと。

フォーラムも同じだったのではないのでしょうか。市民は私と同じように口から泡を飛ばして原子力専門家を攻撃する人ばかりだと思っていたのに、他に誰もいない。だから何も言えない。

その人も、テレビの中で、すごく寂しいですと言っていました。私はこんなに不安に思っているのに、仲間がいないと。

—— 友達をたくさんなくしたと言っていましたね。

—— 加えて、風評被害の問題も関わっていると思います。自分たちが不安だと言った途端に、それが風評被害につながるという意識が大きくなっているような気がするのです。それで口にできなくなっている。

(木村) その辺りについては、崎田さんに記事を書いてもらいました。原子力学会誌に、5月号くらいに載るはずですよ。

「4. 市民と原子力の関係」のところ、そういう話は出てきていないのかな。

—— これは首都圏の市民ですからね。

(木村) 福島の場合は、コミュニティ形成を阻害するから言えない、という問題があります。

フォーラムでは、その問題はないはずですよ。なので、全体の体制の論理ですよ。誰も反対と言わないから、私も言えなくなってしまった、みたいな。

(土田) そうなのですよ。「市民」というのはどういうものか分からないまま参加する。そうしたら、性別・年齢は違うけれども、周りに 9 人ほど、私と同じ「市民」という人がいる。その人たちが何を言うかということ、最初は眺めていたと思うのですよ。

—— 相場観を見ると。

(土田)　そうです。相場観ですね。

(竹中)　そういうことを言っていた方も 1 人いたのですが、このまとめにはうまく反映できませんでした。

——　ということは、本音で語れなかったと？

(竹中)　いや、本音で語ってはいるのですが、自分と同じような考えの人が少なかったとおっしゃっていました。

(木村)　あと、変容の質の問題もあると思います。何かに気づくということも変容だし、気づかないことに気づくのも変容なのです。

(土田)　「知っているということを知っている」「知っているということを知らない」「知らないということを知っている」「知らないということを知らない」とよく言います。

「こういうことを自分は知らなかった」と気づいたとか。

(木村)　「変容」には、そういう部分もあるかもしれません。

(土田)　専門家は、はじめから、市民がアンノウンであることに我々は気づきたい、という構えで入っているかもしれませんね。それは構えすぎだと思うのですが。

(竹中)　専門家の方で、1 人、「こういう意見が出てこなかった」というところに着目をしている人がいたのですが、市民の方は…。

(木村)　「専門家は全然変わる気がないよね」などは近い話だと思いますが。

(土田)　そういう意味では、「気づく」というよりは「決めつけ」かもしれません。「専門家にはどうせ感情なんか分からない」と決めつける。それを補強するために専門家と会う。

(木村)　「自分の認識は変わらなかった」けど、「変わらなかった証拠を得た」ということは、変わっているのですよ。つまり、今まで 1 は 1 だと思っていたけど、より確実に 1 だと分かった、ということ。

——　いろいろな議論の中から、自分の意見を補強するものだけを拾ったということはない

いのですか？

(木村) あると思います。それはよくあるバイアスの話です。

(竹中) それを明確におっしゃってくれた方は、記録として取ってあるのですけれども…。

(土田) 態度の確信度とか、昔からいろいろ議論されているのですが、私のフィールドでも、それをアンケートで測れと言われると、難しいです。

(木村) インタビューでも難しいです。程度なので。

—— 私は、自分の考えがクリアに整理されている人は少ないと思うのです。ある部分は整理されていても、ほとんどの部分はぼんやりしている。

ぼんやりと1かなと思っていたことが、議論の中で、やはり1だったなと思えた。この場合は、明らかに確信度が増しています。

だけど、ほとんどの場合は、1だとは思えなくて、1かな、2かな、3かな、くらいだと思うのです。それで、周りの状況、相場感を見て、これは3と言ったほうがいいみたいだな、というふうになっていく。そういう人のほうが多いと思うのです。

(土田) 今のお話は「沈黙の螺旋」理論といって、ノエレ＝ノイマンが2、30年前に言ったことですが、世論というのは、自分がどう考えているかではなくて、他の人がどう考えているかで決まると。

—— 「知らないことを知ることができた」というような意見が出ていますが、接した方とコミュニケーションの波長が合ったときは、理解がしやすいと思います。やはりコミュニケーションの仕方でかなり変わってくると思うのです。

(竹中) おっしゃっていることはよく分かります。

ただ、「話が分かりやすい方がいた」とインタビューで言ったときに、それが誰かを紐づけることは、残念ながらできません。

(土田) 個人が特定されるのは確かにまずいですが、Aさん、Bさんみたいな形でダイナミクスを見ていってもいいと思いますが。

(木村) いいと思いますよ。むしろ、それが本命です。

(竹中) でも、個人名を出してくれない場合も多いのです。「専門家の方」という言葉が出てきたときに、それを全部 A さんと決めることはできないし、それが誰か判断できないくらいのインタビューの内容です。

(土田) なるほど。「専門家」としか言ってくれないわけか。

(木村) 「何さん」と言っている人もいるでしょう。逆に言うと、名前が出てくる人は影響力がある人なのです。その人が、どういうときに、どういうことを言っているか、それが他の人にどういう影響を及ぼしているかをチェックしてみてもはどうでしょう。

(竹中) 場面が特定できたのは、3割に満たない程度だったのですが。その特定のものを出すというのは、分析としてはどうなのですか？

(木村) 3割もあるならば、やってもいいと思います。

(竹中) 20分の6のものを、こういう例がありました、と出すのはいいと思うのです。ただ、それを、さもこの人に影響力がありましたというふうに出していいものかどうか。

(土田) たかだか20人なので、どんなことをやっても、こういう例がありました、という域は出ませんよ。

(木村) 別に定量化するつもりはないのだから、こういう事例がこういうふうに分かります、というのは、事例として用意しておくに越したことはないと思います。

統計的な話ができるわけではないので、影響力の大きい事例をピックアップして、こういうことが目立ったケースとしてありました、と並べておくのは大切だと思います。例えば、「忘れるのを待っていると思います」という発言とか。

—— そうすると、いい影響力でなくて、悪い影響力でもいいわけですね。

(木村) 構わないです。その辺を整理しておく必要があると思います。

(竹中) はい。影響力の大きい発言については、頭の中でだいたい整理できているので、大丈夫です。

(木村) その辺りのダイナミズムをうまく示してもらえればと思います。

(竹中) ある発言という形で集中させたほうがいいですか？

(木村) いや、発言はひとつの例で、人の存在そのものに影響力がある場合もあるし。思ったよりインパクトがないような人もいるだろうし。同じ意見を言っているはずなのに、片方は受け入れられ、もう片方は受け入れられないような場合もあるでしょう。

—— 「漠然とした不安」という言葉が印象的でした。

(竹中) 専門家から、「市民は漠然とした不安を抱えていることに気づきました」という発言がありましたよね。それに対して、市民は、インタビューで、「専門家はそんなことも気づいていなかったのか」という発言をしている、という相関は見えています。

(木村) そういうダイナミクスをちゃんと見えるようにして、いくつかのケースを整理するのが大切だと思います。

(竹中) そういう意味では、「忘れるのを待っていると思います」という発言は、それを言った人と、それに鋭く反応した人の 2 人にしか影響がなくて、他の人には広がっていませんでした。

(木村) 結局、その 2 人のコンフリクトとして、その場が吸収したわけでしょう。ただ、なぜ吸収できたのかということを検証しておかなければいけないのです。

—— その 2 人以外のそこにいた人が吸収したことのほうが大きいわけですよね。なぜ吸収できたのか。

(木村) 慣れてきたからだと思います。

(土田) それと、関わりたくなかったということでしょう。

—— それについて議論するような時間を割くつもりもなかった？

(木村) いや、議論する時間はあったはずですが、議論になりませんでした。

—— あまりにも極端な発言だったから、議論する気にならなかったのでは。

(土田) つまり、議論もできないほど意見がかけ離れていたということですね。

—— そうということです。

—— 周りの人は、だから、冷静に判断したのだと思います。

(土田) そんなにかけ離れているところまでついていく気にならなかったということでしょう。

(木村) それはフォーラムの限界でもあって、本気の勝負ができる場ではない、ということが見えてくる。でも、そういうときになんとなく緩和できるような仕組みである、とも言える。

(土田) 参加者の方は、皆「大人」だったと思います。言いたいことはあるけれども、これを言うてはいけないな、というか。通奏低音的に、大人でいなければ、という足かせがはたらいているということを前提にして解釈しなければいけないと思います。

—— それと、それまでに参加者が少しずつ成熟しているというプロセスも大事だと思います。

(木村) はい。ということで、機会があれば、先ほど土田先生がおっしゃった付箋の並べ替えをして、整理してみるのとはひとつの方法だと思います。あとは、何かしらのグルーピングと、特殊なケースの洗い出しはしておいたほうが良いと思います。分析は、そういう方向で考えてみてください。

では、ここで少し休憩を入れて、後半はフォーラム参加者の選定プロセスの検討を進めたいと思います。

1. フォーラム参加者について

※本項目については、個人情報を特定できないように注意して、情報を加工しています。

(木村) それでは、フォーラム参加者についての議論を始めたいと思います。

まず、社会調査の結果をご紹介します。F9-5 に、フォーラム参加申込書に該当する部分の社会調査結果が示されています。

最初は、Q1 普段から関心を持っている事柄です。首都圏住民は、「原子力」に対する関心はかなり低下しています。「原子力施設の事故」も同様です。「資源やエネルギー」に対

する関心も低下しています。「自然災害」に対する関心は高位安定ですが、原子力関連の事柄に対する関心は、少なくとも昨年度と比べると、かなり落ちています。

次のページは、原子力学会員の結果です。原子力関連の項目に関しては、大きな変化はありません。

最後のページに Q5（フォーラム参加申込書の Q8）がありますが、原子力発電に対する関心の時系列が出ています。このような形で聞いても、首都圏住民は、昨年度より関心が低下しています。今後どうなるかは分かりませんが、関心の低下が応募数に直結するのではないかと思っています。

（土田） 応募数に直結するかどうかは分かりませんが、関心が低下しているのは間違いありません。

いろいろな世論調査を見ても、原子力反対、原子力廃止という意見は、自民党政権下でも、増加こそすれ、減ってはいません。しかし、現実として原子力政策は再稼働という形で動いている。そうすると、市民としては、もう諦めるしかない。おそらく、都知事選の投票率もそれが反映されていると思います。もう投票に行かない。関心を示さないということでの意思表示をするしかない。

「もう意識から外したい」「原子力について考えたくない」という人が増えているのではないのでしょうか。考えると、苦しくなってしまうから。自分の感性的な本音と、世の中の状況が食い違ってきている。そういう食い違っていていることを話し合う場に行きたいという動機づけが起きてこない。そういう要因はあると思います。

（木村） 少なくとも、原子力という話題に関して、参加する動機が落ちているのは間違いありません。

（土田） もう少し正確に言うと、「参加したくない」という動機が高まっているのだと思います。「面倒くさいことに関わりたくはない」という気持ちではないのでしょうか。

非常にまずい状況になっていると思います。世の中全体の風潮が、原子力許容という方向に動いてきてしまった。一般市民が納得してそう移ってきたわけではないのです。気がついたら世の中がそうなっていたという話です。こうなると、市民は逃げてしまいます。「もう、こういうことは関わりたくない」と。

（木村） そういうこともあって、事前にメールでもご連絡しましたが、フォーラムのシステム化の検証にフォーカスを当てる。公募と並行して、今回の社会調査の意見分布に合った人たちをピックアップして、参加者を構成する、という方向にしようと思っています。我々の中で、それが確認・共有されなければいけないと思っています。

フォーラムというシステムを作ることは大切だと思っているのですけれども、現時点で

このシステムが使えるかという、公募という形式が十分に機能しない。ただ、今後、どこかで何らかの問題が起これ、その業界の信頼が大きく損なわれたときに役に立つシステムを作っておこう、ということに研究の主眼を置いて、その中でどういうダイナミクスがあるのかをしっかりと整理しておく、ということです。

(土田) いいと思います。

(木村) はい。今日はこれからその議論をしたいということです。

その議論は後半にするとして、その前に、フォーラム参加申込書の質問項目について、母集団はどういう結果になっているのかを把握したいと思います。今年度は、震災以前の意見に戻りつつある項目と、震災後さらにひどくなっている項目に分かれているようです。

Q6 (フォーラム参加申込書の Q4)、原子力発電の利用一廃止に関しては、廃止の意見が増えつつあります。

(土田) 原子力学会員も、昨年度、震災前の意見分布に戻るのかと思ったのですけれども、そうではありませんでした。原子力学会も、否定の方向に動きつつあります。

(木村) Q7 (フォーラム参加申込書の Q5) の有用一無用も、同じ傾向があります。

Q8 (フォーラム参加申込書の Q6) の安心一不安に関しては、震災前の意見分布に戻りつつあります。今日はデータを出していませんけれども、信頼に関しても、震災前に戻りつつあります。

Q9 (フォーラム参加申込書の Q7) の経済発展は、原子力発電がなくても発展できるという方向に傾いてきています。アベノミクスがうまくいっているから、どうにかなるのではないか、と考えている人が増えているのだと思います。

Q5 (フォーラム参加申込書の Q8) の関心は、先ほども言いましたが、減ってきています。

母集団は、以上のような傾向です。その他にも項目はたくさんありますが、それは月曜日の業務推進全体会で細かくディスカッションしたいと思います。

母集団の動向を踏まえながら、まずは原子力学会員の基準を決めたいと思います。

(土田) やはり、どこを押さえないければならないというのを、いちいち確認していきましょう。まず、年齢は、40歳以上と40歳未満で2分割したいですね。

(木村) そうですね。

(土田) 性別はどうしますか？

(木村) 原子力学会の女性比率は、約 1 割です。1 人か 2 人は女性を入れたいところです。

あとは、利用—廃止の意見ですが、廃止の意見の専門家も入れますか？ 社会調査では、廃止と答えている方は約 7%です。

(土田) 専門家と称する人の中に、反対だと叫ぶ人がいたら、フォーラムはどうなるのだろうかという興味はあります。

—— そうですね。発言のルールはこちらで制限できますが、発言の内容は自由ですから。

—— 今まで原子力推進のリーダーシップを取っていた先生で、8 割方否定的な現在の世論の中で、自分の信念ではなくて、世論に合わせて行動すべきだと言っている人がいます。

—— 市民が原子力関係の会合を開くとき、賛成の専門家と反対の専門家の両方を入れてくれという要求が強いじゃないですか。だから、廃止の意見の方を入れてもいいと思うのです。反対だとおっしゃる専門家に対して、賛成側の専門家がどんな話をするのか、私は聞きたいと思うのですけど。

ただ、冷静に話してくれる方なのか、あおりたてるように危ないとおっしゃる方なのか分からないから、その点は不安ですけれども。

—— そういう意見の人も積極的に入れているということで、この会のリライアビリティを高めるという意味では、入れる意味はあるかもしれません。

(木村) はい。それに、反対している原子力学会員の方がどういうマインドで反対しているのかが分かるかもしれません。

(土田) それから、前回と同じならば、6 つの専門分野を均等に分けることになります。

—— この 6 つの分類の中だと、発電所の話は 3 番 (核分裂工学) になります。だから、3 番の方は多めのほうがいいと思います。

(木村) では、学会員参加者の基準は固まりました。

では、申込者の分布を把握していきたいと思います。

(機微情報のため削除)

(木村) 次に、首都圏住民参加者の基準を考えたいと思います。前回と同じなら、性別、

年齢、利用－廃止で分けることとなります。利用－廃止は3パターンですね。

(土田) 無理やり2パターンにしてもいいかもしれません。

(木村) 今回の調査結果を見ると、利用が2割、廃止が5割、どちらともいえないが3割です。

(土田) やはり3パターンにしないと駄目ですね。でも、3パターンにしても、この分布なら、廃止2、どちらともいえない1、利用1にしないと。

(木村) そうですね。
では、それらを踏まえて、応募者を見ていきます。

(機微情報のため削除)

—— 参加の意思を聞いた上で、参加申込書を渡すということですね。それが木村先生のところに行くのですね？

(木村) はい。

—— お願いするときには、必ずしも選ばれるとは限らない、と言ったほうがいいですか？

(木村) はい。そう言っておいてください。参加申込書を見て、母集団の意見分布に合うように決めていく、という形式を採りたいと思います。

3. その他

(木村) 最後に、今後の予定をお話しして、終わりにしたいと思います。

来週の月曜日に、業務推進全体会合があります。今年度最後のミーティングになる予定です。

次年度は4月から始まりますので、すぐにでも今日の議論の続きができると思います。

それでは、これで第9回のフォーラム研究会を終了します。

以上